

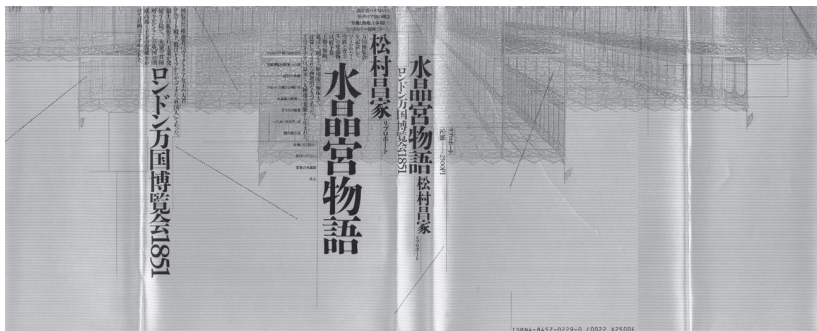
エッセイ

松村昌家著『水晶宮物語』の余白に ——ヴィクトリア朝文化研究の原点と展望——

橋本 順光 (大阪大学)

松村昌家著『水晶宮物語』(1986)は、日本におけるヴィクトリア朝文化研究の原点であり、金字塔とって過言ではないだろう¹。エイザ・ブリッグズへの言及が示唆するように(ちくま学芸文庫版124頁、以下、頁のみ表記)、著者は1950年代から続く学際的なヴィクトリア朝研究を多分に意識しながら、それを日本に移植して独自に開花させた。刊行当時、ブリッグズのヴィクトリア朝三部作の *Victorian People* (1955) と *Victorian Cities* (1963) は刊行されていたものの、最近邦訳された *Victorian Things* (1988) は未刊行だった。人と物と場を立体的に描く方法がそれだけ著者に受け継がれていたからだろう、本書は三部作を先取りするかのように、具体的な事物に注目することで、それをとりまく群像を活写し、そこからヴィクトリア朝の社会全体を浮かび上がらせることに成功している。

ジョゼフ・パクストンは庭師から身を起こし、超人的な努力からサーの称号を手にした。その生涯は、開放的な当時の社会と進取の精神をよく示



している。彼がオオオニバスの形状に想を得て設計した水晶宮は、ガラスと鉄という産業時代の幕開けとその光り輝く未来を寿ぐ万国博覧会そのものだった。したがって、1851年の水晶宮誕生から1936年の焼失までを描く本書は、おのずとヴィクトリア朝の隆盛から終焉までを描くことになる。そうした通史の縦軸に、本書にはアルバート公という横軸が巧みに織り込まれている。ドイツ出身ながら英国の王室に入り、人類の進歩と未来を信じ、それを内外に宣伝する万博の実現に尽力したアルバート公は、水晶宮の理念を体現していた。それゆえ、その無残な焼失は、ヴィクトリア朝的な未来への楽観も消去したことを否応なく読者に実感させる。約3年後、いみじくもドイツがポーランドに侵攻し、世界大戦が始まるからである。

このようにパクストンと水晶宮への注目からヴィクトリア朝の時代精神を活写した本書は、控えめにも物語と題されている。これはそれまで英文学を専門としてきた著者一流の謙遜ではあるだろう。同時に、文化史が学術書というより読み物とみなされた当時の風潮とも無関係ではあるまい。それこそブリッグズらが手探りで始めたヴィクトリア朝研究は、ちょうど日本での江戸文化の研究に似て、しばしば大学などに所属しない独立研究者が支えてきた。切手であれ家具であれ、具体的な事物について時にコレクターも兼ねた博物学的な分類と分析により、時代(と)の諸相を浮かび上がらせる文化史の手法は確かに物語と近い。しかし、今日でそれをいうなら最良の意味での物語という留保をつけるべきだろう。

もっとも、こうした事情は英国でも大差なかった。John M. MacKenzieの *Propaganda and Empire* (1984) が、従来の歴史家が目を向けなかった庶民の生活に注目し、たとえば玩具や包装紙など日用品から帝国意識を明らかにすることで、世界中の研究者に衝撃を与えたのは、本書の2年前のことである。その後、マッケンジーを総編集者とした文化と帝国主義をめぐる学術書が、*Studies in Imperialism* シリーズ(1986～)として今なお刊行されているのはよく知られているよう。一時的に流布するものの消えていくエフェメラは、市井の研究者や蒐集の対象とみなされがちだったのが、マッケンジーの著書とそのシリーズは、それが十分かつ魅力的な歴史研究になりうることを明らかにした。同シリーズには、その名も *Ephemera Vistas* という

水晶宮を表紙にした博覧会の研究書が1988年に刊行されている。呼応して文学の方でも、*Cambridge Studies in Nineteenth-Century Literature and Culture* シリーズ(1994～)の刊行が始まった。同シリーズのなかには歴史研究と見まごう書名も少なくない。文化をどうとらえるかはともかくとして、文化史の成果を貪欲に取り込むことで、学際的な19世紀英国研究が生まれるという熱い期待が、当時とりわけ高まっていた。そんな熱気を『水晶宮物語』が先取りし、いっそう機運を高めたことは特記してよいだろう²。

それは歴史や文学の研究で、ともすれば埋め草扱いだった図版がどれだけ重要であるか、本書が見事に明らかにしたこととも関係している。著者は、図版を多くしたので「絵入り水晶宮物語」として楽しんでほしいと例によって謙遜しているが(254頁)、印刷技術の向上によって大量に流布したヴィクトリア朝の図版をなかなか目にできなかった当時の日本にあって、その魅力を伝えた功績は大きい。豊富に挿入された『パンチ』や『絵入りロンドンニュース』がどれだけ雄弁な資料であるか、一目瞭然だったからである。ここから著者による『『パンチ』素描集-19世紀のロンドン』(岩波文庫, 1994)や『絵入りロンドンニュース』の復刻(柏書房, 1997-2011)などが続々と生まれ、視覚資料を学際的に研究する気風は今やすっかり根付いたといえるだろう。

たしかに現在では、インターネットにより、これらの資料の多くは著者同様に「家にいながらにして」利用できる(253頁)。とはいえ、それを広く日本語で発表できる基盤と市場が著者やその時代の研究によって築かれたことは、改めて確認しておいてよいだろう。この二〇年のあいだ、日本の人文社会系でも専門的な論文ならむしろ英語で書き、海外の雑誌に発表することが珍しくなくなってきた。それはグローバル化の帰結であり、研究の深化ないし住み分けというべきだろう。その一方で、専門的な内容を広く国内に還元する研究書や、それこそTV番組のプレゼンターとして活躍した歴史家の先駆けであるブリッグズのような存在も同時に欠かせまい。そうした関心と読者があってこそ、日本語での研究や翻訳が成り立つからである。その点で、ヴィクトリア朝を題材とした現代の作品は、ヴィクトリア朝研究と持ちつ持たれつの関係とさえいってよいだろう。本学会が、

ネオ・ヴィクトリアニズムに関心がある人々も排除することなく、関連する現代作品も研究の視野に入れているのは、ヴィクトリア朝研究の始まりや成り立ちを考えれば当然のことなのかもしれない。

『水晶宮物語』は、そんなネオ・ヴィクトリアニズムとも実のところ無縁ではない。本書によって明治以来の詩的な訳語とその美しさが広く知られるようになった水晶宮は、今やヴィクトリア朝を舞台とした多くの作品で象徴的な位置を占めるようになった。むろんそれは本書のみに帰せられる功績ではないだろう。ただ例えば岡野史佳の『ハッピー・トーク』全3巻(1990-1991)は、本書なくしては成立しえなかったのではないか。魔法使いの少女が行方知れずとなった友人を追いかけ、ロンドンで性差や階級の規範をめぐる衝突と連帯の末に成長する漫画は、いわゆるヴィクトリア朝ものの定番ではある。ただし、その友人というのが切り倒されたニレの木というのは目をひく。「彼女」は家具に仕立てられており、主人公はその木片を故郷の切り株に埋めて再生させるのだが、その筆筒を取り戻すクライマックスが水晶宮なのである。これはニレの巨木を切り倒さずに水晶宮の内部に収めた逸話がヒントになったのではないか。『ララ』誌上での連載があまり振るわなかったのか後半が駆け足であり、水晶宮は唐突に登場し、その理由は説明されていない。ただ伏線と設定が作り込まれた漫画なので、水晶宮の建設や移築の後も生き延びたニレとの交感が当初は構想されていたのではないか。むろんこれは推測でしかないが、『水晶宮物語』に触発されて生まれた物語の考証は楽しい作業に違いない。

かように視覚資料が豊富な『水晶宮物語』は、同時に良質な視覚文化論ともなっている。入場料が5分の1になる「シリング・デー」では、押し寄せる群衆の方が注目されるなど、博覧会こそ、見る人々が同時に見られる存在となる都市特有の現象を先鋭化していったと示唆したのは、その白眉だろう(189-192頁)。その波紋は、後に『博覧会の政治学』(1992)を記す吉見俊哉が『都市のドラマトゥルギー』(1987)で、高山宏の『目の中の劇場』(1985)とともに本書に言及していることからもうかがえる。こうした視線の交錯については、眺めている英国の人々が日本の岩倉使節団によって眺められていたという、水晶宮のその後をめぐる本書末尾近くの章の伏線

にもなっている。芳賀徹の『大君の使節』(1968)このかた見直された『米欧回覧実記』(1878)が岩波文庫に収録され(1977-82)、吉田光邦編『改訂版万国博覧会－技術文明史的に』(1985)が現れて直後のことである。水晶宮を見学した日本の使節団に言及しているのは、本書を単なる欧米での研究の後追いととどまらない、日本独自のヴィクトリア朝研究たらしめた要因の一つだろう。遣外使節の紀行文が、あの新日本古典文学大系で『海外見聞集』(岩波書店, 2009)として収録され、『水晶宮物語』がしばしば注で参照されているのは、こうした視線の交錯と非対称性をめぐる研究が、広く人文学での標準になったことをよく示している。

遣外使節についていえば、本書が同じ海外視察の発展形たる在外研究制度の副産物であることも注記してよいだろう。著者は1978年から翌年にかけてのロンドン滞在中、「通勤」で通る「クリスタル・パレス」駅に疑問を抱き、その跡地の調査が出発点になったという(251頁)。なるほどパクストンがオオオニバスの観察から鉄骨で支える建築技法を着想したように、著者もまた日々の観察から大業を成し遂げたわけである。ここで興味深いのは、文庫版解説で、著者とほぼ同じく「経済復興期に青年時代を過ごした」村岡健次が、「セルフメイド・マン」への世代的共感があるのではないかと推察している点だ(270頁)。たしかに著者は、ディケンズによるパクストンの賞賛を長く引用し(208-10頁)、水晶宮が7ヵ月間で完成したのは「仕事にたずさわった人たちの「勤勉」と「忍耐」のたまもの」と述べ(131頁)、「お上りさん」や「百姓」が中産階級と衝突することなく博覧会を楽しんだ意義を強調している(189-193頁)。こうした記述は、ヴィクトリア朝での飢餓の1840年代を自身も飢えを体験した1940年代に重ね、1970年の大阪万博を体験したために1851年の万博に惹かれるのかもしれないと吐露する著者の心情と重ねられるのではないかと(257頁)。外国人(アルバート公)と庭師(パクストン)とが帝国統合の象徴を作り上げ、人類の進歩と調和を高らかに謳うのは、1970年の大阪万博の理念と高揚感と共通するものであろう。

関連していえば、書店が今よりもずっと活気あふれていた当時、本書が書棚で輝くように陳列されていたことを記憶する者として、初版の装丁の

美しさも特筆しておきたい。1985年に独立したばかりの鈴木一誌による造本で、カバーを開くと前掲の図のように水晶宮の内部構造図を天地逆転させたデザインになっていることがわかる。オオオニバスの葉脈から水晶宮が着想されたことをふまえ、空中に浮かぶオオオニバスに見立てたのだろうか。出版社は、セゾングループの一つである今は亡きリポポート。人と物とをつなぎ、人類が調和して融合するアルバート公の夢は、ロンドンから世界の隅々にはりめぐらされた流通と交通の網の目を前提としていた。東浩紀は『観光客の哲学』(2017)で『水晶宮物語』を引き、現在の百貨店やモールの起源として水晶宮に注目していたが、まさに水晶宮はセゾンのような鉄道と百貨店という流通網の原点とってよいだろう。表紙のデザインは、鉄骨の水晶宮にそんな網の目も重ねたのかもしれない。

前述の書物で東浩紀は、水晶宮に集まる「観光客」に対し、水晶宮を唾棄したドストエフスキーの『地下生活者の手記』の語り手を「テロリスト」として対照してみせた。これは河上徹太郎によるレオ・シュストフの訳書『悲劇の哲学』(1934)以来の対比を受け継ぐといえよう。実際、日本では、埴谷雄高や加賀乙彦などによって、水晶宮より水晶宮批判の方が有名なところがあった。これは地球を覆いつくす資本主義の「神殿」として水晶宮を一蹴した、ロンドン亡命中のカール・マルクスの批判とも通底する。それこそブリッグズが中心となったBBCでの*Marx in London* (1982)を想起してもよいだろう。その点で『水晶宮物語』に反水晶宮派として登場するのが時代錯誤なシブソープ議員ぐらいというのは、あまりに小粒で物足りなさを否めない。このことは、パクストンがチャツワースの温室でバナナの栽培に成功し、そこで命名したその名もキャヴェンディッシュ種が、バナナ英和国のような今日まで続くモノカルチャー経済を生み出した逸話について、著者は本誌6号(2008)のパクストン伝書評においても触れていないこととかかわるだろう³。

水晶宮にまつわる否定的な側面が見落とされているのは、本書が日本の好景気のなかで書かれたことと関係づけられるかもしれない。だとすれば、昨今のヴィクトリア朝研究で、移民や女性、そして不況や差別について注目するのが珍しくなくなったことは、日本の現況と無縁ではないのだろうか。万博への高揚感はおろか文明への希望も消失しつつあるなか、水晶宮

やヴィクトリア朝の研究も大きく変容していくのだろうか。それを確かめるには、これからさらに二〇年ほどの時間が必要なかもしれない。ただ、今後、ヴィクトリア朝についてどのような物語が書かれるにせよ、『水晶宮物語』がその原点として参照されるのはおそらく確かなことであるに違いない。

注

- 1 以下は、2021年9月25日にオンライン開催された日本比較文学会関西支部例会「比較文学研究の拡張と刷新—松村昌家先生追悼記念シンポジウム」での発表「『水晶宮物語』（1986）の余白に—交通網の整備とバナナ共和国の誕生」の前半部分に基づく。
- 2 松村昌家を筆頭に文学者と歴史家が共同編集した『英国文化の世紀』全5巻（研究社出版、1996）からも、そんな当時の意気込みは伝わってくるだろう。
- 3 著者は『幕末維新使節団のイギリス往還記』（柏書房、2008）で『米欧回覧実記』でのチャツワース・ハウス訪問について、温室での「芭蕉」に触れているが（240頁）、これはキャヴェンディッシュ種のバナナであったのかもしれない。なお水晶宮批判については、汽車嫌いのラスキンが「キュウリの温室」と嘲笑したことも重要だろう。詳しくは喜多千草編著『20世紀の社会と文化』（ミネルヴァ書房、近刊）所収の「グローバリゼーション—世界を呑み込む万国博覧会—」を参照されたい。

